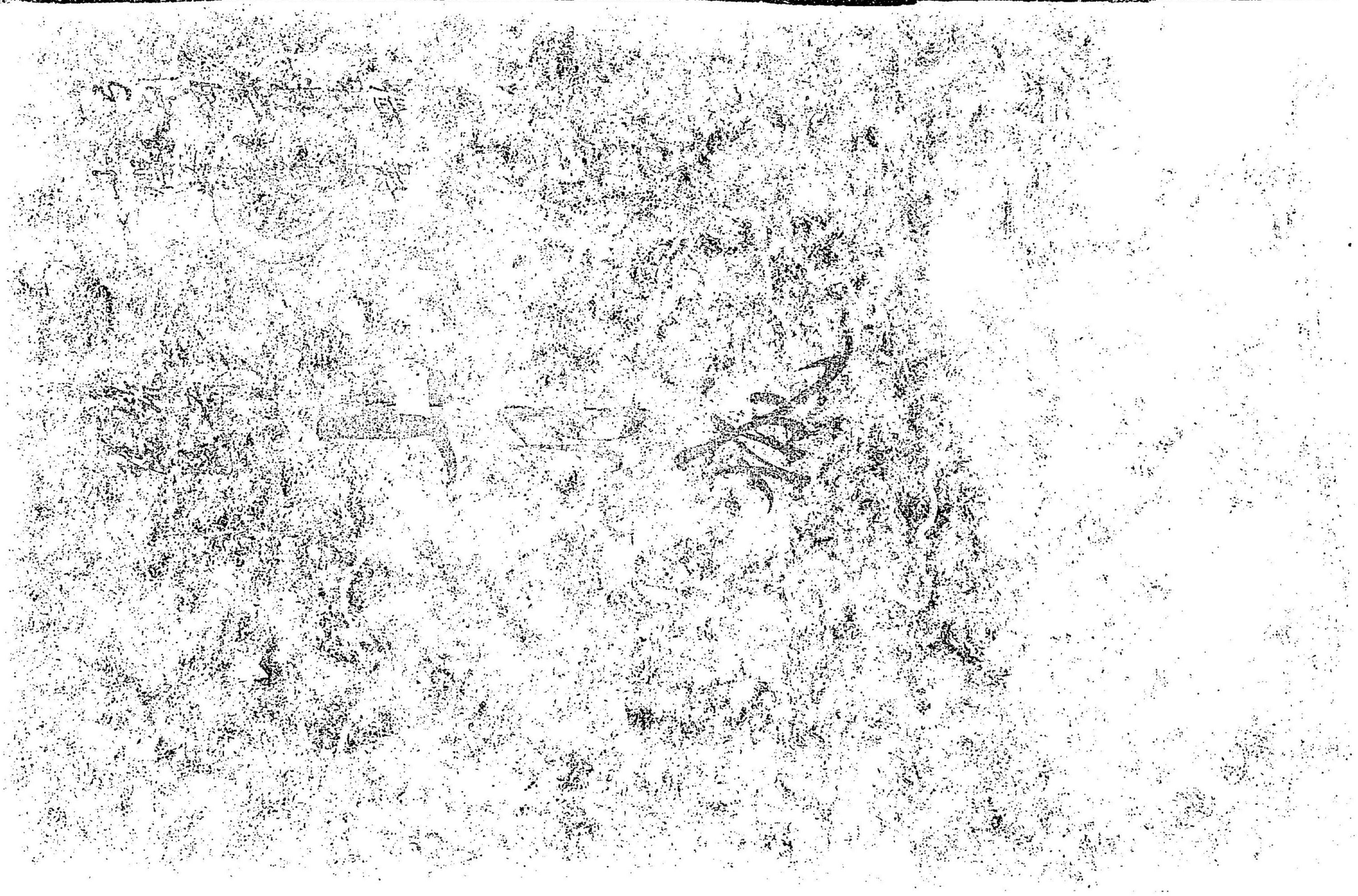

麟市之一

昭和
45. 6. 29
内交

壬子初春

赤城

山中鹿之介幸盛　赤城作

一 傳へ聞く唐の項藉は
二 膂力山拔く勇あるも、
三 垓下の一戰韓信に
武運拙く敗蹟し
四 其古事を偲ぶ人
四 遂に首を授けにし
五 智勇兼備の良將にて、
七 茲に山中鹿介幸盛は

忠烈無比の人なりしかど、
阿井の渡の朝露と
語り出すも中々に
扨も鹿介幸盛は、
勝久君を守り立て、
天運遂に拙くて、
消えし事のあはれさを
哀れ悲惨の事ども多し
亡君尼子経久の末葉
上月城に立籠り
毛利を亡ぼし先君の
千々ふ心を砕きしも
羽柴荒木の諸軍勢
一と先づ陣を旋へせかば
稲麻竹葦の如くにて
修羅の恨みを晴さんと
頼み切たる援軍の
毛利の兵威侮り難く
城を圍める敵軍は
今や上月城の有様は

上旭

そも風前の燈か
翼ある身にあらざれは
苦節十年主家の為
大勢回雖きを知り
悄然として白す様
草に宿れる朝露か
通る術もなかりける
骨を削り肉を刻み幸盛も
主君勝久の前に伺候て
嗚乎微臣幸盛力乏しく
君を補佐けて山陰の
当城将に落ちんとし
空しく嵐単の身なから
末代までの恥辱なり
臣は居残り候ひて
故國を恢復する事能はず
御運の程も迫り候ひぬ
法命を失ひ給はん事
如何潔く出覚悟極はれ
俄に降りて敵に近つき

恨み堪ふる元春と刺違ひ、
修羅の妄執晴しまつらんと
推し量るたふ涙あり、
吾れ元落魄緇衣の身ありしを
一度旗上げ毛利ふ抗し

亡君始め御殿の
聞え上げたる心根は
勝久従容宣ふ様、
汝が忠義の力に依り、
父祖の御冥加畫したり、

仮令再興能はざりしも
さらば幸盛今生の
あられ果敢ふく成り給ふ
復讐の念燃るが如く、
元春と刺し違へんとあせかと

泉下に愧づる更にあし、
別れぞかと宣ひて
幸盛心ふ劍を磨し
さりふき躰ふ降伏し
思ひ事はあぎふや

鵶の嘴と喰ひ違ひ、
安藝路へ下る身となりぬ
さそふ秋風〜みづと
心も曇る山中は
後に見捨て備中地
其身楚囚の人となり
時〜も頃は文月半ば過
早や缺げ初める月影の
名殘惜〜も上月を
阿井の渡〜に著にけり
其身楚囚にありながら
川邊の岩に腰打掛け
敵將河村新左衛門
聲をも懸けず後ろより
あられ千古の英雄も
膽斗の如き幸盛は、
報復の謀ぶる餘念
折もあれ
時分はよしと忍び寄り
発矢と計り斬り付れば、
思設けぬ事あれば

六 アッとばかりに驚きて
四 川下さして駈り行
四 猪口才ありとふり返り
五 躍りかゝつて組み伏せたり
四 真一文字ふ馳せ来り
飛鳥の如く身を躍らせ
後逐ひすがる河村を
六 猛虎の如く幸盛は
四 夫れと見るより福間彦右衛門
六 襟髪ムンズとひつ掴み

五 エイト後へふ引倒せば
四 はね返へさんと焦りしも
四 可惜名を得し勇将も
七 松山城の麓なる
尽きぬ恨みを残しけり

痛手あるとも幸盛は
五 二人の猛士に劣りかね
八 三十四歳を一期とし
五 阿井の渡ふ失せ果て

六 憂き事の猶この上に積れかし
限りある身の力ためさん

三 斯くぞ咏めし英雄も
四 力餘りて運滅く
甲 雷光一閃消へて行く
上 春 玉と砕けし武士の
中 忠勇義烈の挙動は

下 聞だに最も勇ましく
中 其名は畫きぬ忠臣の
五 語り傳へて世の人の
留 青史の表を飾らん

上 甲部の流れは尽きるとも
下 昔語りを琵琶の音に
初 眠を斯に覚さん

明治四十五年六月二十四日印刷
明治四十五年六月三十日發行　定價四拾錢

島根縣松江市母衣十二番地
著作兼發行者　弓削田千吉

島根縣松江市天神町四十番地
印刷者　秦慶之助

島根縣松江市殿町三百八十三番地
印刷所　松陽新報社

2W-3

074697−000−3

特67−997

筑前琵琶上月城

弓削田　赤城（千吉）／歌

小桜　峰筑風／曲

M45

CEJ−0285

303
698